

ドル/円相場のトレード戦略

■ 中長期展望

注目されていた英国の国民投票の結果は、大方の予想を裏切る EU 離脱となりました。ドル/円相場は直近の安値 103 円 55 銭をあっさり割り込み、2013 年 11 月以来の 100 円割れとなり、一時 99 円ちょうどの安値まで下落しました。

【ドル/円 週足】



英国の EU 離脱は世界経済の先行き不透明感を強め、また米国の早期利上げを妨げるものと捉えられており、中期的にドル/円は円安に大きく戻る見通しはとて描けず、95 円割れをもイメージする必要が出てきました。

95 円水準は、2011 年の安値から 2015 年の高値の 61.8% 戻しとなっており、当面のドル/円の下値の目処となります。

しかし、52 週移動平均との乖離で見ると、6 月 24 日につけた 99 円では約 15% の下方乖離となり、リーマンショックを受けドルが下落した 2008 年の下方乖離とほぼ同じ水準になることから、過度な下がり過ぎの反動での短期的なドルの戻りも期待されます。

また、10 兆円規模の大型補正予算への期待やヘリコプターマネー政策への思惑が円の上値を抑える要因となっていることから、当面は再び 100 円～110 円のレンジ相場が続くこととなりそうです。

■ 短期展望

先週は、日本の経済対策期待や堅調な米指標、欧州市場の落ち着きを背景に 107 円半ばまでドル

ドル/円相場のトレード戦略

が上昇しました。

今週も基調としてはドルの底堅い動きを予想しますが、米国の FOMC と日銀金融政策決定会合が予定されており、相場の波乱要因となりそうです。

米 FOMC では、現状維持との見方が支配的ですが、最近の良好な経済指標を受けて利上げ再開ムードが高まる発言が出る可能性があります。

そのため、週前半では、利上げ期待を織り込む形でドルは強含む可能性が高いと考えます。

その場合のポイントは先週高値の 107 円半ばで、これを上抜けることが出来るかどうか注目されます。

一方、日銀金融政策決定会合では、追加緩和期待が強いものの、見送られる可能性もあり、その場合には失望からのドル売りが強まるでしょう。

以上のことから、コアレンジを 105 円～107 円としますが、日米金融当局の対応によっては上下に振り回される可能性もあり、その場合は 103 円～108 円半ばまでを見ておく必要があるかもしれません。